

1組 27番 名前 平賀 帆一

【映画】

おクジラ様 ふたつの正義の物語

【レビュー】

捕鯨は禁止すべきか？



あらすじ

映画の舞台となったのは和歌山県大地町。ここは鯨(イルカ)の町として知られている。昔から捕鯨活動が活発であり、鯨を飼として捕らえている。これを国際問題として集まった外国人ジャーナリストは反捕鯨運動、報道を始める。捕鯨を守る日本人と捕鯨を許さない外国人の二項対立の物語。

問題・意見

- | 捕鯨賛成(大地町)側 | 捕鯨反対(外国人)側 |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none">• 捕鯨は昔からの伝統であり、文化である。• 大地町のことは大地町が決める。• 鯨が人々の腹を満たし、特産物となっている。 | <ul style="list-style-type: none">• 鯨(イルカ)は食用として食べるべきではない。• 鯨を守りたいのではなく、海を守りたい。• 大地町側は動物を大切にしていると言っているが、そうには見えない。 |

自分の考え

私は捕鯨はすべきではないと思う。長年にわたって殺されてきたのは鯨の一種であるイルカである。イルカは知的な生き物であり、人間に害を与えることはほとんどない。大地町側は捕鯨は文化・伝統であると言い張るが、そのように言ってしまうとそれまでである。何も先に進まない。また捕鯨に賛成する日本人は約7割近くいるそうだが、実際鯨肉を食べる人はきわめて少ないのである。人々に広く愛されている鯨・イルカを食用として食べることは考えていかなければならない課題である。



映画でつながる。未来がはじまる。
By UNITED PEOPLE

9 組 2 番 名前 安倍 陽貴

【映画】

おクジラさま ふたつの正義の物語 (原題) A Whale of A Tale

【レビュー】

<イルカ魚に関する様々な意見、立場>

漁師 捕鯨は続ける。

捕鯨は、600年続く、この土地の伝統で生活するもの。
私たちは、全ての部位を食すことなく美味しく食べてきた。
クジラとイルカに常に感謝の気持ちを持っている。
捕まえるのは、絶滅危惧種ではなく、量も多くない。

市長

市のことは、市民で決める(干渉をしてくるな)
子供の健康を第一に考えて、水銀測定→被害はない。
イルカを集める大型施設を建造中。

市の水族館

イルカを見るようにするより、見た方が、どんな生物か
よく分かってもらえるし、それが水族館の役割。
協会から脱会させられても、独自に続けていく。

<感じたこと、考えたこと>

小さな町で唯一の産業である捕鯨に海外の団体の目が向けられ差別、偏見のある情報発信をされていることは、正確でも何でも無いことであると思ふ。鯨は助けられ命を繋いできた人々は、どこの人かより鯨に感謝し、鯨と共に生きてきたと言えるだろう。日本では、鯨のどの部分も無駄にはない持続可能な漁業としてきたが、十八世紀の欧米は大型船で多くの鯨を捕獲して鯨油だけとって捨てる数が激減した。私はこのことに怒りを覚えた。それにお鯨保護運動が盛んになり、昔から大切に鯨を食べてきた日本人の町を確立することにも許せないことだと思ふ。自由とは何だ、その自由を奪うことの大切さを改めて感じた。その現場で住み込みで所を見つけたアメリカのジャーナリストがいたことは唯一の救いであると感じた。彼は日本間言葉も解らない人だから、よく努力して状況を分析して、意義のあるコメントをたくさんしてくれた。

最後に私が一番疑問に思ふのは、この問題に対して、政府関係者が全く出てこなかったことだ。危機に瀕している小さな町を守ることが政府の役割なのである。仮に鯨の生態調査、地元の人の声の発信、海外NGOとの対話、そのほかにも関係者各々が協力して、この問題を解決するのは、イルカの町と自分自身を守るため、そして鯨の町を守るためだ。

シーシェパード 反捕鯨団体

クジラ、イルカは特別な動物。魚は残虐。
水族館に売るとは、奴隷売買のようだ。
漁師たちはイルカの命を何とも思っていない。
アメリカは、環境保護を転換して日本もするべき。

日本のイルカ保護活動家

捕鯨自体に全く反対というよりは、
イルカの分布を調査して、個体数を把握したい。
日本人の8割以上は捕鯨に賛成だが、食べる人はそんなに多くはない。どこか食べる文化の人がいるのは寂しい。

ジュイ、アラバスター 中立のジャーナリスト

住み込みで地元の人のことをよく知ろうと努力し、
公平な立場で状況を分析して来た。
シーシェパードの情報発信は知覚位と強力で、
市のHPの更新は年に一度程度と少ないことに
問題意識をもった。



映画でつながる。未来がはじまる。
By UNITED PEOPLE

4組 2番 名前 石井 岳人

【映画】

おろしうせき ふたつの正義の物語

【レビュー】

この映画は、本当に善悪の判断がしにくい。捕魚業の可否についての映画だった。舞台は和歌山県太地町。町の生計は捕魚業により成り立っている。朗らかな港町。物語はアカデミー賞を受賞した映画『THE COVE』が公開されたことと端を発する。THE COVEは太地町で行われていた捕魚業を痛烈に批判した映画で、世界中で物議をかもした。その後、過激な活動をする環境保護団体「シーシェパード」が乗り込んで、シーシェパードのシーズンを通して監視し、漁師達に対して殺し屋、冷酷な怪物、などという罵倒を交すながらそれを生配信する。漁師達は罵倒に耐えながら漁を続けた。太地町で捕魚業反対派との意見交換会が開かれる。状況は全く好転しない。そんな環境で、漁師達は捕魚業を続ける。そんなストーリーだった。

自分には、捕魚業は続ける方がいいのか止めた方がいいのかというのは全くわからない。しかし、環境保護団体の人間やリベラル達との違いはないかと思う。太地町側の人間は、真摯に対応し、人に対しては相対して尊敬の念を抱きながら活動している。それなのに反対派の人間は、ただ一方的に漁業関係者を罵倒し続ける。人に対しては、執拗にかうと向うそれに対して顔面を隠す。自分の行いに恥じているのか？恥を分かち、この野郎、なにと暴言を吐く始末だ。これでは、どうして反対派を支持する気にはなれない。実際の賛否については、反対派の多くは、見受けているもの。本当にこの問題を真剣に受け止めて活動している人は、ほんの一握りではないかと思う。前述の意見交換会の際中には、笑い声が聞け、活動中に取材のカメラに対して笑顔でヒールズと見せる反対派の人間もいる。まあ、かたや漁師は捕魚業に生計がかかっているのに対して、反対派の人間は手放して批判しているだけだ。その上、漁師は力だけじゃなく、知能の高さという特別扱いするのはどうかと思う。反対派の人間の大規模な活動の結果、世界中から動物園、水族館がなくなると文句を言い始めるのだから、と考へておられる。そのような状況に鑑み、伝統を重んじる視点から考へると、捕魚業は許可されるべきではないか、と僕は思った。